

雜 録

詩 歌 の 虚 實

椽 堂

詩歌は誠をいふものなり、うそをいふものにあらず、今の詩人歌人は、皆うそをいひ、人にをしふるも、うそをいふことを教ふるなり、識者は去からず、人の詩歌を直して與ふるも、第一その虚を直して、誠の道にひきいるゝなり、ありがたきことなり、かくてこそ風俗をもあらため、人心をも正すといふべけれ、和州三輪の布袋屋某は、同國並松の周齋子か門人なり、年こる歌を嗜み、ある年の春、花とのみ見しは麓の心にて雲分登る三よまのゝやま、

とよみ、添刪を乞ひしに、師もよるこび、近頃の秀作なり、と稱せられ、おのれも、またよみ得たりと大によるこび、京に登る序に、冷泉爲村卿の御許にまうで、御覽に入れしに、卿、やゝ沈吟して、さて骨を折りつらん、されども歌にならず、と給せられければ、大に肝をけし、まばしありて、御添刪を乞ひしに、硯ひきよせて、上の五文字を、まら雲ととあらため、下の雲を、花にあらためて、さて仰せられけるは、その方のよみは悉く偽なり、白雲とみるも、虚ながらこゝが歌の脈なり、と有ければ、かの男、感歎して退きしとぞ、げにも骨隨はこゝぞとれもはる、まらず、この處に心を用ひて、歌よむ人も、直す人もありや、よくく味ひて、その意の虚實をしるべきなり、鹿持正澄か萬葉古義にも、この虚實を論じて、いへらく、柿本朝臣が、石見國より妻に別れて、上らるゝ時の長歌の終に、

ますらをとおもへる我も、まら妙の衣の袖は、透りてぬれぬ、

とあり、心あさきに似て、深き所あり、逢ふも、別るゝも、かしてき勅命なれば、女によりて、心を動かすことはせまじと、いかばかり思ひたけびても、誰も下には、めゝしく、はかなき心の興りて、別を悲しむ旅情には、たへられぬ習なるに、強てさる心を包みかくして、さるめゝしきことは思はずと、うはべに丈夫づくりて、人にをゝしく思はせむ、と構ふるは偽なり、誠の心にはあらず、されば、その誠の心のあるがまゝを、つくろはす、丈夫とれもへる我なれど、猶忍あへず、袖とほるばかりに泣ぬらしつ、といへるをば、誰かはあはれとれもはざらむ、古今集に、

わかすして別るゝ袖の白玉は君か形見とつゝみてそゆく

とあるは、心深きに似て、淺き所あり、夫婦にまれ、親子にまれ、別るゝ時になりて、涙の玉と見ゆばかりに、落ちむは猶さることもある習なり、といふべけれど、そを眞の玉のごとくに、つゝみてもちゆかむといふとも、誰もさわらんとは思ふことならねば、かの袖のとほりてぬるゝよし、たゞあるがまゝを、いへるにはたがひて、却て心あさし、かくさまにいふととなれるより、我おとらじと、或は涙によりて、川水のまざる趣にいひ、或は身さへ流るゝよしにたくみ設けて、競ひ言へること多けれど、皆たゝ口先の深さくらべのみにて、すべて身にしみて悲まるゝはなま、古今集すらかの朝臣などの歌にくらぶればかくのごとし、ましてそれよりこの方は、いふ迄もなきことなり云々といへり、これも至極の論なり、されども、歌にまれ、詩にまれ、實といふは意なり、詞には虚もあるべきなり、虚ならでは實をあらはすこと、叶はざることのあればなり、これを虚實相救といふ、世の中の人、この虚の詞のするより、いつしか實の意を傷ふなり、詞の虚といふは詩もていはん、

閑庭種梅動明月この句も下、少く違へり、よくも覺えす、今はその意を取るのみなり。

これらの句、何と虚にはあらずや、されども、明月を鋤くといふには、月夜梅をうゑたるけしき、月に
さながらにて、その味つきず、萩原綠野か詩集を見るに、夜坐の詩あり、化工の筆なり、その句に、

秋河低樹已三更、獨在閑窓剪短檠、夜靜中庭零露白、一叢明月照蟲聲

とあり、一叢の明月蟲聲を照らす、是虚にあらずや、今この實をいはむとて、一叢蟲鳴明月下、とい
はゞいかにそや、これにて詩歌の巧拙を定むべく、はたまた虚實の兩用をもまゑるべきなり、詞巧なれ
ば實いよく、あらはるなり、巧すぐれば實却てうせぬるなり、古今集以下の歌は、皆詞の巧すぎて、實
のうせぬるなり、詩も唐より後の詩は皆これなり、實をいふこともしらねば、虚を使ふこともまらぬ
なり、我これによりて、古今集以上の歌は、この意をとりて、この詞をとらず、以下の歌は、この詞をと
りて、その意をとらず、意は皆うそなり、只うその詞をとりて、實の意に用ひんとなり、爲村卿の御直
に、白雲とゞいふもうそなれども、こゝが歌の骨髓なりといはれしは、この意もこゝぞとおもはる、詞
のねき處をかへられしなり、その意の實ををしへられしなり、白雲とゞしてうそなれども、といはれ
しは詞の虚ををしへられしなり、詩も歌もこゝを悟りなば、名將を兵を用ふがごとくなるべし、虚々
實々、勝を取ることを神のことくならん。

韓 文 公 (承前)

杏 城 生

第五章

(十) 淮西の征に従ふ